

哀歎抄（二十）

尾崎 文英

願掛けのひと一人ある真昼間の初瀬観音ひた静かなり

あらたまのかくも真青な海を見失ひしものころにかへる

白鷗を窓に見て居る松川の詩人として人は憩ふも

おだやかな熱海の海の砂浜に冬鷗居れば妻と見て佇つ

春衣秘めてはなさぬ人居ると冊子に見たり大雪の朝

カーテンにふるるがごとく旭はさして春となりある心たひらぐ

真白に母が洗ひしエプロンをみずゞが掛ける風薫るなり

何万の鰯の中に憩ふひと赤き帯して素足のままに

ゆふいんを馬車が走れば土手際の浅き水辺に小魚の群れ

われもまた合掌したり折々に古き佛にやまざくら散る

削り捨て捨てては削る語彙世界徒勞のはてに一語と出会ふ

年老いてなほも愛しき夫婦にて世を語りある白蓮の歌



沖縄の焦土のあとの写真見る炭と化したる母娘の遺体

蓮の葉の小さきところにヒメダカはつと泳げり秋日燦燦

われか娘か重なりてくる日々となる共に佛弟子靈山の中

明るい方明るい方へと向日葵の花のやうなるひと日一生

高原のをみな美し径を来る透き通る風梳りつつ

稲妻と突風の中峰を越ゆ自転車漕いで少年二人

ほうほうと森の中をばはしる走る宮澤賢治マントが翅に

齒科医院玄関屋根が涼しさう栗毛の仔猫平たく眠る

九十二くじゅうにの義姉あねの指先はなれきて折り紙の独楽卓をまはれり

少年の心はいつも海を見る漁り火ひとつ明滅しをり

長寿とはまことめでたし哀歎を語りしときにいのちつたはる

はれやかな笑顔となりて四方よもを見る淺野先生うた誌の人なり

(『日本短歌協会会員』)

